**夏堀　正元 （なつぼり・まさもと）**

**１、プロフィール**

小説家。記者出身の作家にふさわしく、戦後社会の歪んだ組織と人間性喪失の主題を、精力的に追求した『罠(わな)』『豚とミサイル』などに社会派としての本領を示す。

＜生没＞

1925（大正14）年１月30日 ～ 1999（平成11）年１月４日

＜代表作＞

小説『罠 (わな)』『愛の傷み』『蝕まれた愛』『目覚めし人ありて』

＜青森との関わり＞

父は三戸郡福地村出身、初の公選八戸市長。正元は八戸中学校に在学した。

**２、作家解説**

父は三戸郡福地村出身の判事で、夏堀正元は、父の小樽地方裁判所在職中に生まれた。大正12年小樽中学校に入学、14年八戸中学校に転入学、16年同校を中央大学予科入学のために、４年修了をもって中退している。

父は、18年八戸で弁護士を開業、21年には初の公選市長となる。

19年早稲田大学国文科入学、戦中軍役に服した後、復員して大学に戻るが、25年中退。北海道新聞東京支社に入り、29年まで勤務しながら、創作や評論に多彩な活躍をする。

31年「呪文脱出」（「新潮」）でデビュー。35年下山事件に取材した、長編小説『罠(わな)』を刊行、荒正人、野間宏らに評価される。36年〈占領〉と〈地方政治〉と〈家〉の連動する世相の中での男女の愛を描いた『愛の傷み』を刊行。

38年雑誌「新婦人｣に一年間連載した「蝕まれた愛」は､人間心理と表現行為にメスを入れた作品。45年短篇「幻の北海道共和国」（原題「囚人共和国」、短編集『幻の北海道共和国』所収）は、安藤昌益思想の影響を受け、榎本武揚の変節を罵倒する硬骨漢を描いた。

戦後社会の歪み、組織間の矛盾、人間性喪失といった、すぐれて現代的主観を執拗に描いた作品を精力的に発表し、その反サロン的、民衆指向が評価されている。

**３、資料紹介**

〇『戊辰の果て』

図書

1965（昭和54）年５月30日

195mm×133mm

短編集『とんからりん』所収。戊辰戦争時の野辺地戦争大概記である。官軍応援に駆けつけた、軍艦陽春丸の野辺地砲撃、野辺地口での津軽・南部両藩の衝突と勝敗の模様。戦後、新政府による盛岡・八戸両藩処分の状況など手堅くまとめた短篇歴史小説。